正倉院年報

一、古裂の整理

昭和二十六年度においては主として第九十三号興福寺古材櫃に納める布類塵芥と第百二十号古櫃に収納する屏風心布に附着残破せる屏風画面の整理を行なつた。その結果は次のとおりである。

一、布　断　片　　二十六片

細布、白布、麁布の各種にわたり広長各々差があつて、二幅又は三幅を継ぎ合わせた敷布と考えられるもの、褥又は帯の心布、或は布幡の垂脚と思われるものなどが含まれている。片端に調庸の墨書銘を有するもの二片がある。

細　布　　一条　長一六七・五糎　幅三六糎

墨書「平羣郡□□郷清□里大弓マ□(得)万呂調布壱端長四丈二尺　天平九□」国印一所

白　布　　一条　長二八〇糎　幅六八糎

墨書「相模国鎌倉郡方瀬郷戸主□(部)□(稲麻呂カ)□連□庸布壱□(端)□(長四丈二尺)天平勝□(幅)□主当国司史生従八位上坂合□郡司少領従八位上□□臣国足(他田)」国印二所、又「一条二副四丈□尺(二)破」の墨書がある。

一、鳥木石夾纈屏風画面残片

一、鹿夾纈屏風画面残片

右二点は献物帳（国家珍宝帳）所載の屏風の画面であつて各々二扇に相当する残片である。曾て屏風骨に貼付せる心布を剝取した際心布に付着残存したもので、残破の余小片数十片となり且つ逸失の部分が多く図様は復原することは困難である。今小片を蒐集して帖冊に貼つて保存することゝした。

一、屏風縁裂残片

赤地臈纈絁と紫地臈纈絁の二種で前記屏風の縁裂である。珍宝帳いうところの紅臈纈縁、滅紫蒲纈縁に当るものであろう。今硝子挾二枚に装した。

二、宝物の修理

本年度において宝物の修理を終えたものは次のとおりである。

一、馬　鞍　　一具　第六号

鞍橋(くらぼね)、鞍褥(くらしき)、韉(したくら)、屢背(なめ)、鐙、銜、三懸が具備している。鞍橋は前後の両軸は櫟地の桑、四枚居木は樫で作り、鞍褥は表裏に燻革を張り、表には花喰鳥と唐草模様、裏には上下に唐草文を表わしている。裏面に白革の座と紐とが付してあるがこれは鞍褥を居木に緊縛

する拵である。鞦は表に黒漆塗の皺革を張り裏は白革、心は白布、藺莚、二枚、白布、藺莚二枚、白布の順に重ねてある。厩背は白絁の表で、花枝飛鳥文の燻革の縁を廻らし、裏は細布、心は藺莚の両面に布を重ね、更にその上に細布を張る。鐙は鉄製黒漆塗の壺鐙で鉄製兵具鋂の鐙靴を付す。銜は蒺藜銜、引手は捩り巻いて千段巻の如くし、面懸付は兵具鋂をつけている。いずれも鉄製黒漆を塗る。三懸は緋又は白の平打絹の貫緒に黒、白、赤に染め分けた鹿角製の丸玉を貫き連ねている。尻懸の尾挾のみは緋仙台打でその端に辻総をかけている。手綱は布丸絎、腹帯は布平絎である。

一、赤漆柳箱　竪五一糎　横四六糎　高一二糎

第七十号古櫃に納める柳箱葛箱残闕中のもので、赤漆長方形、蓋盒とも縁は木製黒漆塗である。その編み方は大体今の柳行季と同様であるが四隅の編み寄せ方が異なる。編糸は絹糸を用いている。宝庫に残る柳箱中最大のもので何を納めたか明らかでない。

三、経巻の修理

聖語蔵経巻の修理は前年の緒を継ぎ本年度において修理を完了したものは乙種写経の部大般若経五十八巻である。それぞれ旧態を存して修理を施した。その巻中識語あるものを掲げると次のとおりである。

巻二百十九「□(文)永弐年初月日　為法縁助成書写了　円蔵房勝鑒」

巻二百七十三　巻末貼箋墨書「花をのみをしみなき(ママ)に三吉野の木の間にをつるありあけの月　一乗院覚英僧上御弟子覚信御よみ歟」

巻三百三十第十四紙に墨書「山州相楽郡稲八間庄日向宮」、巻末墨書「正中元年甲子七月十六日ニ京都日(?)十八ノカ、リノフシコノ庄ニ入リテ焼払了□ノ御経ハ別ノ御□ナシ」

巻三百卅二（もと巻二百卅一となす。今内題によつて改めた。）「嘉慶二戊辰年三月日　薬師寺八幡宮　山城国奥戸里書写畢」

四、宝物の特別調査

(イ) 硝子調査

硝子調査は去る昭和三十四年度より始まり本年を以て終了した。本年度においては主として昨年度に引き続き中倉、南倉に所属するガラス玉について調査が行なわれた。

就中南倉所属の雑玉幡残闕（幡と称せられているが雑玉を銀線に貫いて籠目に編んだ円形のもので花筥或は華鬘の類であろう）は第一年度に調査されたが今回これに補足再検討が加えられた。本品は硝子玉の色の配列が最も古様を存し、一定の順序に従つて暈繝配色をなしている。この硝子玉のうち淡褐色または黄色の玉に赤褐色の樹脂状の物質が附着しているものがあり、精査の結果これは汚れではなく、アルコール可溶性の赤色物質を塗布したものであることが明らかとなつた。天平六年造仏所作物帳断簡（正倉院古文書続修第三十四巻）に記載されている「麒麟血赤刺玉染料」とある

赤色染料に該当するものと推定された。これが果して作物帳謂うところの麒麟血か否かは更に化学的な調査に俟たなければならないが、ともあれ赤染刺玉が発見されたことはまことに珍とすべきである。調査員は日本学士院会員文学博士原田淑人、日展参事各務鉱三、名古屋大学教授理学博士山崎一雄、東京国立博物館学芸部美術課長岡田譲の四氏である。

(ロ) 紙質調査

紙質調査は昨年度に引き続き行なわれたが、本年度においては主として日本各地の紙を調査の対象とし、正倉院古文書中の国印のある文書を比較検討した。調査の結果、国印の捺された地方からの文書即ち戸籍、計帳、正税帳類は、大体その国の産紙と考えられ、いずれの国も用いた原料は楮（奈良時代の穀）で、良質紙を使つている国は大和、摂津、和泉、山背の畿内諸国と越前、下総、越中等現在でも有名な紙漉場として知られているところに多いこと、また近世まで雁皮の産地として名を知られた駿河のものは良質の雁皮紙が用いられていること、また大和、和泉、越前、伊豆等のものにも雁皮紙がみられることが判明した。調査員は甲南大学教授文学博士寿岳文章、関西医科大学教授医学博士大沢忍、京都工芸繊維大学教授理学博士町田誠之、大阪学芸大学教授理学博士上村六郎、製紙実技者安部栄四郎の五氏である。

五、聖語蔵古訓点経巻の複製

本年度における古訓点経巻の複製移点を完成したものは次の三巻である。移点は奈良学芸大学教授鈴木一男氏に依嘱して行なつた。

一、神護景雲二年御願経第一〇号大方広仏華厳経巻九　一巻

本経の白点は加点様式からみて極めて初期のもので、恐らく奈良末または平安極初期延暦頃のものと推定される。ヲコト点は漢字の周囲にやや長めの星点七箇と線点一箇中央に星点一箇の九箇をもつ単純なものであるが右側三箇は上、中、下がテニハと連序され後世の三論点の祖点を推定する資料となる。これらヲコト点はテ、ニ、ハ、ノ、ト、ヲ等主要助詞を示すに用いられるが、中央の星点は活用語尾「ス」を示し、左下の星点は助動詞「リ、ナリ」と格助詞「ヨリ」の「リ」を示すのに使用されているのは、発生期におけるヲコト点の機能を考察する上から見逃がすことができない。傍訓の仮名字体には高度の略体が認められ、それら仮名と併用された略体虚字は後にヲコト点化するものである。これらは天地に注記された大字仮名訓とともにすべて初期点本の特色を示すものである。

一、甲種写経第七七号金剛般若経讃述巻下　一巻

本経巻の巻末に以嘉祥四年四月廿八日於崇福寺聴了　講師（以下二字不明）という二行の白書識語がある。成実論天長五年点より二十三年後の加点で、加点場所が崇福寺とあるのも珍とすべきである。ヲコト点は全巻にわたり精密に加えられている。本点と同系の点本は発見されておらず、系統関係を結びつけることのできるものもな

い特異な点本で春日政治博士は崇福寺点と仮称している。

一、乙種写経第二七号　中　観　論巻三　一巻

本経巻の書写年代は平安初期であろうが、全巻に加えられた白点は本文書写年代から余り遠くない頃であろう。加点は二回に及ぶが初点と次点とは余り年時の差もなくヲコト点も極めて近似しているので、同じ宗派の学侶によつてなされたものと思われる。ヲコト点は西墓点に属し成実論天長点の流をくむ大乗広百論釈承和八年点、大乗掌珍論嘉祥二年点に近い関係にあり、加点年代もほぼこの前後と推定される。複雑なヲコト点には訓読の順序を示す数字が加えられてあるのもこの一群の点本に共通の特色である。西墓点の系統研究上貴重な点本であつて、国語史資料としての価値は今更贅言を要しない。加点が二回にわたるので本巻の移点に際しては、初点には白群を使用し、次点には胡粉を使用することにした。

六、古文書マイクロ・フィルムの作成

昭和二十九年以後引きつゞき行なわれている正倉院古文書類のマイクロフイルムの撮影は、本年度において続々修第二十五帙第一巻、同第二十六帙第三巻、および同第三十帙第二巻から同第三十六帙第二冊まで、計四十五巻と二冊を了した。